

採用年度	種別	分科細目	採用番号
平成15年度	拠点形成促進型	情報学・認知科学	15001

研究交流課題名 (和文) 人間の進化の霊長類的起源
 (英文) Primate Origins of Human Evolution

経費支給期間 平成16年2月1日 ~ 平成18年1月31日(24ヶ月)

実施組織

日本側実施組織

拠点機関	京都大学
コーディネーター所属部局	霊長類研究所
コーディネーター職・氏名(フリガナ)	教授・松沢 哲郎(マツザワ テツロウ)
協力機関数	12

相手国側実施組織 1

国名	ドイツ連邦共和国
拠点機関	マックスプランク進化人類学研究所
コーディネーター所属部局	認知発達心理学部門
コーディネーター職・氏名	教授・マイケル トマセロ
協力機関数	

相手国側実施組織 2

国名	アメリカ合衆国
拠点機関	ハーバード大学
コーディネーター所属部局	比較動物学ミュージアム
コーディネーター職・氏名	教授 ・ リチャード・ランガム
協力機関数	

本年度の研究交流実績

(共同研究)

研究成果

ドイツのマックスプランク進化人類学研究所のマイケル・トマセロ所長をはじめとする認知発達科学の研究グループと共同して、人間の認知機能の発達とその進化的基盤に関する研究をおこなった。ドイツ側がおもに社会的知性の側面を担当し、日本側はおもに道具的知性の側面を担当した。また、マックスプランク進化人類学研究所の比較ゲノム研究部門と共同研究をおこなった。さらに、言語や認知ともからむ形態・化石資料についての情報交換をおこなった。アメリカの拠点であるハーバード大学人類学部を加えた3者で、おもに大型類人猿の野外調査をおこなった。チンパンジーについて、アフリカの東部・中央部・西部で住み分けた担当とした。日本のユニークな貢献として、ザイールでの野生ボノボの野外研究と、ボルネオの野生オランウータンの野外研究をおこない、その生態と社会についての新たな知見を加えた。

進捗・交流状況

15年度末に3つの拠点研究機関の代表が京都に集って、HOPEプロジェクトの発足ワークショップをおこなった。それをきっかけに平成16年度を通して、27件の海外渡航と10件の招聘を通じて、人類の起源の霊長類的基盤を探る共同研究を多面的に展開した。なお、8月にイタリアで、国際霊長類学会の開催を契機に、日独米の3人のコーチェアが会談した。これにイタリアのエリザベッタ・ビザルベルギ博士を加えて、平成17年度以降に先端研究拠点事業HOPEをイタリアにも展開する話し合いをした。

(セミナー)

16年度中に10件の海外からの招聘事業をおこない、それをもとにセミナー等の国際集会を開催した。8月にイタリアで開催した国際ワークショップには、日独米のほかイタリア・オランダ・フランス・ブラジルからの参加があり、それぞれのマッチングファンドをもちよる形式で、経費の負担は軽いままに密度の濃い情報交換の場を作ることができた。3月に開催の日本での国際ワークショップでは、人間の認知機能の進化的基盤を探るために鳥類にまで拡大した検討を企画した。来年度以降のHOPEの拡大を視野に入れて英国オックスフォード大学の若手3研究者を招聘したものであり、焦点の鮮明な国際集会をおこなうことができた。なお上記の2回の国際ワークショップに加えて、ドイツ側のコーチェアであるトマセロ博士をはじめとして合計4回の国際レクチャーをおこなった。さらに旅費を必要としないセミナーとして、外国人訪問研究者の機会をとらえて、合計5回の国際セミナーをおこなった。

(研究者交流)

とくにポスドク(PD)を中心とした若手研究者をドイツ等に派遣して、心・体・社会・ゲノムという4つの側面から、人間の進化の霊長類的起源にかんする多様な研究を推進した。こうした若手研究者の派遣は12件にのぼる。本プロジェクトのユニークな特徴のひとつは野外研究である。チンパンジー、ボノボ、オランウータン、バーバリーマカクの野外研究をおこなった。さらにその成果を比較検討する作業を通じて、マックスプランク進化人類学研究所とハーバード大学人類学部という2つの先端研究拠点ならびにその関係諸機関と交流した。

年度計画の達成状況（自己評価）

H O P E 事業は、平成15年度末に、先端研究拠点事業の第1号として発足した。平成16年度は、最初の2年間のプロジェクトの核となる年だと位置づけられる。結果として、27件の海外渡航と10件の招聘の合計38事業を通じて、きわめて密度の濃い国際的な先端研究のネットワークづくりができたと思う。ドイツのマックスプランク進化人類学研究所と、アメリカのハーバード大学人類学部と、日本の京都大学霊長類研究所が、ヨーロッパと北米とアジアの拠点になって、人類の進化の霊長類的起源というテーマにそって、野外研究を初めとする多様な研究を推進できたと自己評価したい。

次年度以降の展望（計画目標の達成に向けた課題）

次年度（平成17年度）は、日独米の3拠点を中心に、心・体・社会・ゲノムという4つの視点から、人間の本性とその進化の霊長類的基盤についての研究をさらに推進したい。具体的には、29件の事業（共同研究、セミナー、若手交流）を企画している。16年度に引き続いて、野外研究というユニークな視点を盛り込んだ学際的なアプローチと、その国際的な協力体制の構築を目指したい。